

[論 文]

接触場面における 日本語学習者の聞き返し使用の縦断的研究 —3人の中国人日本語学習者の在日9か月間の発話データをもとに—

許 挺傑

キーワード：感動詞型聞き返し、聞き返し連鎖、縦断的、言語使用のかたまり

1. 研究背景と目的

日本語学習者は、日本語能力の獲得が不十分なゆえに、日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて、母語話者の話が聞き取れない、分からないという問題に遭遇することが多い。日本語教育では、これらの問題を解決するための手段としての聞き返しに注目し、日本語学習者が効果的に聞き返しを使用しているかに関する研究が多く見られる。しかし、先行研究では、学習者の日本語能力の差が聞き返しの使用にどのように影響するかを調査するため、日本語能力の異なる学習者の発話データを横断的に収集し、分析しているものが多いが、日本語を習得する過程の中で、聞き返しがどのように使用され、どのように使用状況が変化していくかなどについての縦断的な研究は少ない。

本研究は、日本人との接触場面の縦断的な会話データを用いて、学習者の聞き返し使用が、滞日期間が長くなるにつれ、どのように変化するかを量的・質的に考察する。

2. 聞き返しの定義と分類

聞き返しの定義は、多くの先行研究に引用されている尾崎(1992)に従う。つまり、聞き返しとは、相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策である。聞き返しの分類は、尾崎(2001)の分類を発展させた許(2013)に従うことにする。

許(2013)では、尾崎(2001)の分類をもとに、データで見られたすべての聞き返しの特徴を観察した上で、次のように分類している。

エコー型 : 単純エコー型(確認)、単純エコー型(訂正)
複合エコー型(確認)、複合エコー型(繰り返し)、
複合エコー型(説明)

非エコー型 : 感動詞型、言い換え型、その他型

聞き返しは、先行発話を繰り返しているかどうかで、エコー型と非エコー型がある。エ

コー型には、先行発話を単純にエコーしている場合と、エコーした上で、「～はなんですか」のような+ α を付け加える場合がある。それぞれ単純エコー型と複合エコー型とする。なお、単純エコー型と複合エコー型には、さらにそれぞれ下位分類がある。また、非エコー型には、感動詞や応答詞を使用して聞き返す場合「感動詞型」、先行発話を自分の言葉で言い換えて聞き返す場合「言い換え型」、先行発話に対して、「分からない」をいう場合「その他型¹」の3つがある。以下では、例1およびそれをもとにした作例を用いて説明する。

例1 「好きなビールの銘柄」²

375. NS2 :=好きな (0.2) ビールの: (.) ん::銘柄.

376. (0.8)

377. NNS2:銘柄? ←「単純エコー型(確認)」

378. NS2 :=銘柄.

379. (1.0)

380. NNS2:あん: (.) 好きなビールの名前ですか? ←「言い換え型」

381. NS2 :=うん.

382. NNS2:.hhん:[:やはり (0.2) キリン.

例えば、例1の375行目の質問に対して、質問にある「銘柄」を取り出し、それを上昇イントネーションで単純エコーしている場合は、単純エコー型の聞き返しとなる(表1の①)。この場合、聞き返しをされた側が、「うん、ええ」などを用いて確認を与えることが出来るため、単純エコー型(確認)とする。一方で、特に日本語学習者の発話データに多く見られるものであるが、表1の②のように、間違っただけで繰り返してしまう場合がある。その場合は、①のように、「うん、ええ」などを用いて確認を与えることが出来ず、その代わりに何らかの方法で訂正を行うことがもめられるため、①と区別するため、ここでは②を、単純エコー型(訂正)とする。

また、③～⑤のように、先行発話の一部を繰り返したうえで、+ α を付け加える場合は、その+ α の発話形式によって、下位分類が出来る。③は、銘柄について、説明を求める発話形式となっているため、④は、確認を求める発話形式となっているため、⑤は、「銘柄」の部分の繰り返しを求める発話形式となっているため、それぞれを複合エコー型(説明)、複合エコー型(確認)、複合エコー型(繰り返し)とする。

¹ 上記以外のものを指す意味で「その他」型にしてあるのみであり、今後さらに検討する必要がある。

² 文字化の方法は本稿末尾の「文字化の方法」を参照されたい。

【表 1】 聞き返しの分類と例

エコー型	例	略
①単純エコー型（確認）	銘柄→銘柄？	単（確認）
②単純エコー型（訂正）	銘柄→めいがっ、めいげら？	単（訂正）
③複合エコー型（説明）	銘柄とは何ですか？	複（説明）
④複合エコー型（確認）	好きなビール、私？	複（確認）
⑤複合エコー型（繰り返し）	好きなビールの何？	複（繰返）
非エコー型		
⑥言い換え型	好きなビールの名前ですか？	言換
⑦感動詞型	え？はい？うん？	感動詞
⑧その他型	上記以外で特に「わからない」を言う場合	その他

3. 調査協力者情報と分析手法

本研究で分析するのは3名の学習者（NNS1、NNS2、NNS3）の発話である。全員2008年の4月に留学目的で初来日している。NNS1（女性）とNNS2（女性）は、中国の同じ大学で日本語を専攻しており、NNS1（4年次）はNNS2（3年次）の1年先輩である。来日時には2人とも日本語能力試験の2級レベルであった。NNS3（男性）は日本語専攻の学生ではないが、民間の日本語学校に通ったり、独学したりして来日時には6年間の日本語学習歴があり、日本語能力試験の1級にも比較的高い点数で合格している。2級保持者の2人は来日した年の12月に日本語能力試験の1級を受けたが、NNS2が合格し、NNS1が不合格であったという。上記を総合的に判断すると、日本語能力の高い順はNNS3、NNS2、NNS1となる。

会話の相手となる日本人（男性、NS1とNS2）は、3人の留学先の大学生で、英語を専攻している。中国語にも興味を持っているが、体系的に中国語を習ったことはない。会話の収録は、2008年の5月から開始し、7月、9月、11月、翌年の1月までそれぞれ5回³行われた。自然談話における学習者の聞き返し使用を観察するのが目的であるため、特に話題は指定せず、「20分ほど自由に喋ってください」という指示のみを出した。1回20分ほどの2者間会話を14回収録した（総時間数289分19秒、約5時間分）。また、なるべく直前の回と違う組み合わせとなるように心がけたが、参加者の都合で連続して同じ人と話すこともあった。話された話題は大学の授業や先生、普段の生活、日本の習慣、中華料理、観光など、大部分が身近な話題であった。録音した全ての会話を分析の材料とした。

分析は次のような手順で行った。まず、文字化した会話資料をもとに、2節で述べた聞き返しの分類に従い、各会話における聞き返しの使用回数と使用例を集計した。次に、学

³ NNS3が最後の収録の前に、緊急帰国したため、NNS3のみ、4回分である。

習者の会話相手である日本人の会話における発話量（「実質的発話における使用語の延べ語数」）を集計し、学習者が聞かなければならない発話の量に対して、いくつの聞き返しを使用したか、聞き返しの使用率を算出した。ここでは、聞き返しの回数/「実質的発話」における使用語で得られる使用率という概念を用いることにする⁴。最後に、会話ごとの聞き返し使用の特徴を観察し、分析を行った。

4. 結果と考察

4. 1 全体的な傾向

3節で述べたことを踏まえ、学習者NNS1、NNS2、NNS3の各会話における聞き返しの使用回数とNSの「実質的発話」における使用語1000語あたりに換算された使用率について調査した（表2）。

【表2】 学習者の聞き返し使用回数と平均使用率

	時期	5月	7月	9月	11月	1月	合計 (使用率)
N N S 1	聞き返し	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)
	単(確認)	10(20.2)	7(7.5)	17(15.2)	14(18.0)	7(8.9)	55(13.4)
	単(訂正)	6(12.1)	1(1.1)	4(3.6)	2(2.6)	1(1.3)	14(3.4)
	複(確認)	1(2.0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.2)
	複(繰返)	1(2.0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.2)
	複(説明)	1(2.0)	1(1.1)	1(0.9)	0(0)	0(0)	3(0.7)
	感動詞	2(4.0)	0(0)	4(3.6)	3(3.9)	2(2.5)	11(2.7)
	言換	0(0)	1(1.1)	0(0)	0(0)	1(1.3)	2(0.5)
	その他	0(0)	0(0)	2(1.8)	0(0)	0(0)	2(0.5)
	合計	21(42.4)	10(10.7)	28(25.1)	19(24.5)	11(14.0)	89(21.6)
	NS I 発話量	495	936	1116	777	787	4111

⁴ これは、各会話において学習者が聞かなければならない相手発話の量の多少が学習者の聞き返し使用に大きく影響すると思われるためである。聞き返しの使用というのは、会話相手の発話を聞いて、その発話の中に、聞き取れないものや分からないものがあるのはじめて使用するものである。発話量の集計は、日本人の発話の内、「実質的発話」（杉戸1987）の部分抽出し、その部分に対し、「リーディング・チュータの語彙チェッカー」（川村1998）を利用し、「実質的発話」における使用語の延べ語数、異なり語数、およびその百分率を求めた。ここでは、日本人の「実質的発話」における使用語の延べ語数を、学習者の聞かなければならない発話量とする。

	時期	5月	7月	9月	11月	1月	合計 (使用率)
NNS2	聞き返し	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)
	単(確認)	5(7.5)	8(7.6)	3(3.1)	11(8.4)	5(4.2)	32(6.2)
	単(訂正)	2(3.0)	2(1.9)	0(0)	5(3.8)	1(0.8)	10(1.9)
	複(確認)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.8)	1(0.2)
	複(繰返)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.8)	1(0.2)
	複(説明)	0(0)	1(1.0)	0(0)	1(0.8)	0(0)	2(0.4)
	感動詞	1(1.5)	0(0)	3(3.1)	8(6.1)	1(0.8)	13(2.5)
	言換	0(0)	3(2.9)	1(1.0)	1(0.8)	1(0.8)	6(1.2)
	その他	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.8)	2(0.4)
	合計	8(11.9)	14(13.3)	7(7.3)	26(19.8)	11(9.3)	66(12.8)
	NSII発話量	671	1049	953	1315	1185	5173
NNS3	聞き返し	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)
	単(確認)	0(0)	3(4.4)	5(5.9)	8(7.6)		16(5.1)
	単(訂正)	1(1.8)	4(5.9)	1(1.2)	2(1.9)		8(2.6)
	複(確認)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)
	複(繰返)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)
	複(説明)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)
	感動詞	1(1.8)	0(0)	1(1.2)	3(2.9)		5(1.6)
	言換	0(0)	0(0)	6(7.1)	3(2.9)		9(2.9)
	その他	0(0)	1(1.5)	0(0)	0(0)		1(0.3)
	合計	2(3.6)	8(11.8)	13(15.4)	16(15.3)		39(12.5)
	NSIII発話量	554	676	842	1047		3119

表2を見ると、NNS1、NNS2、NNS3のそれぞれの聞き返しの平均使用率は、21.6%、12.8%、12.5%であることが分かる。これは学習者が母語話者とのコミュニケーションにおいて、日本人の発した「実質的発話」における使用語1000語を聞いたときに、それぞれ平均21.6回、12.8回、12.5回の聞き返しを使用したということを意味する。3節で述べたように、この3人の総合的な日本語能力は高い順にNNS3>NNS2>NNS1となっているが、発話聴解上の問題を解決するために用いられる聞き返し使用率は高い順に、NNS1>NNS2>NNS3>となっており、ちょうどその逆順となっていることが分かる。

これは全体的に日本語能力の高い学習者ほど聞き返しの使用量が少ないということの意味しており、日本語能力が高ければ、語彙や文法能力の習得が進み、発話聴解上の問題を解決するための聞き返しを発動しなくてもそれほど問題なくコミュニケーションを維持することができるのに対し、日本語能力の低い学習者の場合は、語彙や文法能力の習得が遅れ、発話聴解上の問題が生じやすく、それを解決するために聞き返しの発動頻度が高く

なつたと推測される。

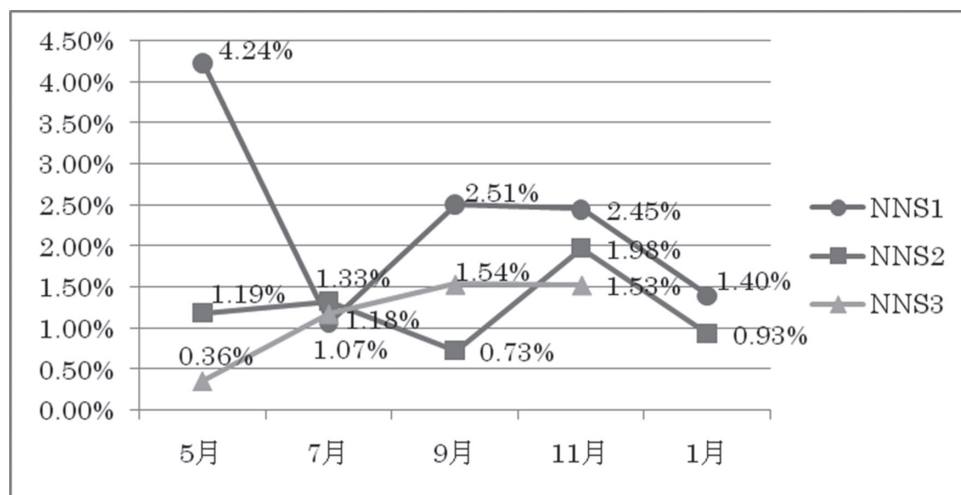
また、ここで、特に言及すべきなのは、中級学習者NNS2の聞き返しの平均使用率が来日当初は同じ2級レベルであったNNS1の平均使用率より低くだけでなく、来日当初すでに1級レベルであった上級学習者NNS3の平均使用率に近い点である。これも3節で述べた9か月間の滞日期間におけるNNS1とNNS2の日本語能力の伸びの度合いなどが関係していると思われる。

4. 2 量的な変化

本節では、時間軸に沿って、学習者の聞き返し使用の推移に関する全体的な使用傾向を見ることにする。

図1を見ると分かるように、3人の聞き返し使用の特徴を時系列に沿って観察しても、当初の予想とは裏腹に、時間の経過とともに聞き返しの使用が減少するという現象はなく、これといった顕著な傾向も見られなかった。

NNS1とNNS2は使用率が回によって高くなったり低くなったりしており、特に傾向といった傾向は見られない。一方、学習者NNS3は、1回目の使用率があまりに低かったためか、その後聞き返しの使用率が高くなっていくことが分かる。時間の経過とともに、日本語能力が高くならなかったとしても、能力が急激に低くなることも考えにくいので、聞き返しの使用は日本語能力のみならず、会話の話題や参加者など他の要因も影響していることの表れであろう。



【図1】 時間軸に沿った聞き返し使用の推移

一方で日本語能力の高低によると思われる聞き返し使用の差異が観察される。

NNS1とNNS2は時期によって聞き返しの使用率が大きく揺れ動いているが、7月期を除き、NNS2は基本的にどの時期においてもNNS1のそれよりも低い使用率である。

NNS3は、5月期の1回目あまりに少なかったためか、その後減少傾向どころか、回

を重ねるごとに使用率が高くなっていくが、しかし、その使用率が最高でも、1.54%であり、NNS2の最高使用率(1.98%)を超えることはなく、NNS1の平均使用率(2.16%)よりずっと低い。

これらは上記で述べた3人の全体的な平均使用率の差とも一致しているように思える。

4. 3 質的な変化

学習者の聞き返し使用に形式的にどのような変化が見られたか、そのような変化があったのはなぜかなどについて例を挙げながら見ていきたい。

学習者の聞き返し使用に関しては、NNS2の「感動詞型」聞き返しの使用と、NNS3の「聞き返し連鎖」の使用に特徴的な変化が見られた。

4. 3. 1 NNS2の「感動詞型」聞き返し使用に見られる変化

「感動詞型」聞き返しは、感動詞や応答詞などを用いた聞き返しである。例えば、「うん?」や「はい?」のような応答詞や、「え?」などの感動詞などがそれにあたる。さらに、単独の「なに?」を用いたものもある。

「感動詞型」聞き返しは、日本語能力の高低を問わず、3人ともよく使用するが、上で挙げた具体的な形式のどれを使用するかに関しては、異なりがある。

NNS1は、5回の会話において感動詞型を11回使用しているが、「なに?」と「はい?」と「うん?」はそれぞれ0回、1回、1回の使用であるのに対し、「え?」は9回使用している。NNS2は、5回の会話において感動詞型を13回使用しているが、「なに?」と「はい?」と「え?」はそれぞれ1回、0回、1回であった。それに対して、「うん?」の使用は10回もあった。上記以外に、中国語の「感動詞型」聞き返しと思われる「あん?」の使用も1回あった。NNS3は、4回の会話において感動詞型を5回しているが、「なに?」が1回で、他の4回はすべて「はい?」であった。

上記のような使用の相違は何によるものなのかに関しては、更に検討する必要があるが、「感動詞型」聞き返しの使用を縦断的に観察してみるとNNS2の使用に変化が見られた。それは次のような変化であった。

上述したように、NNS2は基本的に「うん?」を中心に使用しているが、最初から「うん?」を多く使用しているわけではない(表3)。

【表3】 時間軸に沿ったNNS2の感動詞型聞き返しの使用特徴

時 期	形 式	回 数
5月	あん?	1回
7月		0回
9月	うん?・なに?	2回・1回
11月	うん?・え?	7回・1回
1月	うん?	1回

表3を見ると分かるように、NNS2は5月期と7月期の会話においては、「うん?」を使用した「感動詞型」聞き返しは1回もなかった。9月期の3回目以降から「うん?」を使った「感動詞型」聞き返しの使用が頻繁になってきたのである。また、そもそも9月期以前は、「感動詞型」聞き返しそのものの使用量も非常に少なかった。では、NNS2が9月期以前はどのようなものを使っていたかという点、それは次の例のような「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しであった。

例2 「先生の特徴について」

238. NS1 : ちょっとあれなんだよ[あのう、ひとりだけちょっと浮いてるんだよ。

239. NNS2: [hehehe

240. NNS2: あん? ←「感動詞型」

241. NS1 : ういーういているっていうのはね、

242. NNS2: うん::

NNS2の留学先の大学の先生について話しているところであるが、たくさんいる先生の中で1人だけ非常に個性の強い先生がいることについてNS1は、「浮いている」という言葉を使って表現している。

しかし、先生が「浮いている」という言葉がNNS2にとってあまりに斬新すぎた言葉なのか、それに対して、「あん?」と言って聞き返しを行っている。そして、それを受けて、NS1は241行目で、「浮いている」という言葉についての説明を開始する。

「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しは、日本語にはないとは言いつても言い切れないが、友人同士の場合でもよほどの状況でない限り、それを使用しないであろうし、上記の例のように、初対面の会話(上記の会話は5月期の1回目の会話)において、相手の発話に対して、大きな声で「あん?」というのは、ぶっきらぼうな印象を与えてしまう恐れがあると思われる。

しかし、中国語は上記の「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しは、初対面の会話であっても、同世代の相手なら使用しても特に問題のないものである。

NNS2は、上記のような「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しに関する日中両言語における使用の差異に気づかずに、使用したのではないと思われる。

しかし、その使用も5月期の1回目の会話のみで、その後は、「うん?」を使った「感動詞型」聞き返しを多用するようになった。

このように、NNS2は5月期1回目の会話の際に、中国語の聞き返しであると思われる「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しの使用があったが、2回目以降はその使用は見られなくなり、その代わりに、日本語としても自然な「感動詞型」聞き返しである「うん?」を多用するという使用の変化が見られた。

用例が少ないうえに、1人の学習者にだけ観察された現象であるため、一般化することはできないと思われる。しかし、上記のような変化が見られたのは、NNS2が滞日中において、日本語母語話者がよく使用する「感動詞型」聞き返しに「あん?」を使ったものが少なく、「うん?」などを使ったものが多いことに気づき、その後、使用のスタイルを変

更したのであろうと推測される。

一方で、縦断的研究ではないが、堀内(2011)にも中国語を母語とする日本語学習者が「ああ?」を使った「感動詞型」聞き返しを使用したことで、会話相手の日本人に「相手に怒られたように感じた。びっくりした。」(堀内2011、p.318)との印象を抱かせたことを報告している。堀内(2011)で挙げられている例は次のようなものである。

例3 「先週見た映画について」

NS16 : じゃあ 先週は「△△△(映画のタイトル)を」見に行っただんですが(↑)

NNS 6 : {NSの発話が聞き取れず} ああ(↑) {かなり大きな声で}

この例は中級学習者の聞き返し使用の問題点として挙げられた例である。会話収録後のフォローアップインタビューで確認したところ、学習者のNNS 6は、不適切な聞き返しをしたとは思っていなかったという。

「ああ?」と「あん?」は、「あ?」で終わるか、「ん?」で終わるかで形式上、若干の相違はあるものの、母音の「あ」で始まっていることで共通している。また、初対面同士の会話では使用されにくいという点も同じである。しかし、どちらも中国語の会話においては、それほど問題にならないものである。

堀内(2011)の研究は横断的な研究であるため、中国語を母語とする日本語学習者NNS 6がその後も相変わらず「ああ?」の「感動詞型」聞き返しを使い続けているのか、それとも本研究で見たように、日本人との接触経験を重ねていくうちに、中国語の聞き返しであると思われる「ああ?」の使用から日本語としても自然な「感動詞型」聞き返しである「うん?」「え?」「はい?」の使用へとシフトしていったのかは不明である。

中国語を母語とする日本語学習者すべてが同じようにこのような不適切な「感動詞型」聞き返しを使用するとは限らないが、本研究以外でも同じような現象を報告している研究がある以上、上記で述べたように、「あ」系「感動詞型」⁵聞き返しに対して、日本語と中国語の両言語では、容認度が異なることがある点を意識されるべきであろう。また、中

⁵ 興味深いことに、日本語の会話では「あん?」「ああ?」の2つのみならず、「はあ?」を使った「感動詞型」聞き返しも特殊な場面を除き、一般的に望ましくないものとされる。「はあ?」にあたる中国語の聞き返しはないが、「あん?」「ああ?」「はあ?」の3つは、母音の中で口の開きが最も大きい「あ」が用いられている点で共通しているため、この3つを「あ」系感動詞型聞き返しと呼ぶことが可能であろう。それらに下降調のイントネーションをつけるか、上昇調のイントネーションをつけるかで、機能が異なってくることは容易に想像できる。例えば、下降調の場合、「ああ↓」「あん↓」「はあ↓」の3つは理解や感心(+理解、+感心と示すことが可能)を表すが、上昇調の場合は、理解や感心をしていないこと(-理解、-感心)を表すことになる。しかし、後者に関しては、日本語では、一般的に使用されにくいものであるが、中国語では、理解や感心を示す前者はもちろんのこと、後者の場合でも一般的に使用されている。この違いは、単なる偶然か、あるいは言語文化による違いなのかは不明であるが、非常に興味深い現象であるため、今後さらに探求をしていきたい。

国語を母語とする日本語学習者の日本語教育を考える際に、その点についての注意喚起を行う必要があるであろう。

4. 3. 2 NNS3の「聞き返し連鎖」の使用に見られる変化

上記のような「感動詞型」聞き返し使用に見られたNNS2の使用変化以外に、NNS3の「聞き返し連鎖」の使用にも変化が見られた。

聞き返し連鎖とは、先行発話に対する聞き取り・意味理解の問題が生じた際に、1回の聞き返しだけで問題の全面的な解決ができず、2回以上の聞き返しを使用することによって問題解決を試みるものである。

NNS3の聞き返し連鎖の使用にどのような変化が見られたかを見るために、以下において、まずNNS3の使用したすべての聞き返し連鎖のパターンを時間軸に沿って示す。

5月期の会話：連鎖0回

7月期の会話：連鎖3回

連鎖：単純エコー型(訂正)→単純エコー型(訂正)

単純エコー型(訂正)→単純エコー型(確認)

単純エコー型(訂正)→その他型

9月期の会話：連鎖3回

連鎖：単純エコー型(確認)→単純エコー型(確認)→言い換え型

単純エコー型(確認)→言い換え型

単純エコー型(確認)→言い換え型

11月期の会話：連鎖4回

連鎖：感動詞型→単純エコー型(確認)

感動詞型→単純エコー型(確認)

単純エコー型(訂正)→単純エコー型(確認)

単純エコー型(確認)→単純エコー型(確認)→言い換え型

上記のように、NNS3の聞き返し連鎖の使用に、2回以上使用される聞き返し連鎖のパターンは3パターンである。聞き返し連鎖の例が10例しかない中において、2回以上同じ連鎖パターンが観察されるということは、それらのパターンは比較的安定して用いられているということであろう。

以下、それぞれのパターンの特徴について見ていく。

まず、「単純エコー型(訂正)→単純エコー型(確認)」であるが、このパターンは、2回目の会話と4回目の会話においてそれぞれ1回ずつ観察されている。なお、この連鎖が起きた際には、以下の例4のようなことが行われている。

例4 「単位の話について」

502.NS1 :だいたい何単位ぐらい考えているんですか?

503. (0.8)

504.NNS3:なんたい? ←「単純エコー型(訂正)」

505. NS1 :何単:位.

506. NNS3:何単位?e::今年は60単位.hehe= ←「単純エコー型(確認)」

聞き取れなかった部分について、NNSが聞き取れた音をそのまま繰り返し、そして、NNSが先行発話を正確にエコーできていないのを見て、NSが問題箇所をもう一度正確に繰り返す。それによってNNSは2回目の聞き返しでは、正確にエコーすることになる。

次に、「単純エコー型(確認)→言い換え型」のパターンもよく利用されている。

このパターンは、1回目と2回目の会話にはなかったが、3回目の会話の際に3回観察されており、4回目の会話の際にも1回の使用が観察される。

例5の209行目は、例4の504行目のような先行発話に対する不正確な繰り返しがない。そのため、NSは210行目で「うん」ということで確認を与え、そして、2回目の聞き返しとして、問題箇所に対するNNS自身の理解(授業ですか?)を述べることで、問題解決を試みる。

例5 「発表が必要なクラスについて」

204. NS1 :.hhいや(0.8)だいたいそんで::,あれっすか,(0.8)まあゼミ:があっ

205. て,他になんか発表とか(1.6)してるクラスってあ-ありますか?

206. (0.8)

207. NNS3:°はい°

208. NS1 :発表が必要なクラスって.

209. NNS3:発表必-要なクラス, ←「単純エコー型(確認)」

210. NS1 :うん.

211. NNS3:e::,授業ですか? ←「言い換え型」

212. NS1 :うん.

213. NNS3:ほか::,はありません,ゼミ,ゼミだけ.

更に、次のような「感動詞型→単純エコー型(確認)」というパターンも2回以上の使用が観察された。2回とも4回目の会話での使用であった。

このパターンは、次の例6のように、NNSがまず「感動詞型」を用いて、問題の発話の繰り返しを促し、そして、それを受け、NSが問題源となる発話の部分を繰り返す。最後にNNSがもう一度問題源となる発話の部分を上昇イントネーションで繰り返し、確認を求めることで問題解決を試みるものである。

例6 「きゅうりをどう食べるかということについて」

69. NS1 :=あのう(0.6)なんだっけ(0.4)きゅうりってあるじゃないっすか.

70. NNS3:はい? ←「感動詞型」

71. NS1 :きゅうり.

72. NNS3:きゅうり? ←「単純エコー型(確認)」

73. NS1 :うん.

74. NNS3: あ:, きゅうり, [あ:はい.
 76. NS1 : [炒めますか?ehe.
 77. NNS3: あ::, 食べます.

上記の3種類の聞き返し連鎖パターンはどれも2回以上観察されており、NNS3にとっては安定的に使用していると言えよう。

ここで特に注目したいのは、上記3種類の聞き返し連鎖の出現時期である。

「単純エコー型(訂正)→単純エコー型(確認)」は、7月期と11月期

「単純エコー型(確認)→言い換え型」は、9月期と11月期

「感動詞型→単純エコー型(確認)」は、11月期

3種類の聞き返し連鎖パターンの出現時期を見ると分かるように、NNS3は時間の経過とともに、最初に使用した連鎖パターンも残しつつ、少しずつ新しい連鎖パターンも使用するようになってきたということが見てとれる。

上記のような使用特徴が観察されたのは、NNS3の日本語能力の変化という点とどう関係するかは不明であるが、1回の聞き返しだけでは全面的な問題解決ができず、複数回の聞き返しを利用しなければならない際に、問題の性質などによって、その複数回の聞き返しをどのように配置するかに関してある種の「言語使用のかたまり」として滞日期间中に習得したのではないかと思われる。

日本語学習者の日本語習得に関する研究では、従来はある特定の文法項目に焦点を絞ってその習得状況を見ていくというタイプの研究が多かったが、山内(2004)では、最初からある特定の文法項目を絞らず、Nグラム⁶という手法を用いて、KYコーパス⁷にある学習者の発話データにおいて出現頻度の高い文字列を抽出することで、日本語能力の異なる学習者の言語使用の様々なパターンの抽出に成功している。一例を挙げると、例えば、中級話者が頻繁に使用している4文字以上の文字列の第1位は「はいはい」であるのに対し、上級話者は「ちょっと」であり、超級話者は「んですけ」であるという。このように、日本語能力の差によって、それぞれよく使用するパターンとしての「言語のかたまり」というものが異なっていることが分かる。

本節で見た学習者NNS3の聞き返し連鎖の使用パターンは、ある文法項目の使用に関するパターンではなく、聴解問題が生じた際における言語使用のパターンであるが、このような言語使用のパターンについても、今後は日本語能力の高低という観点などから考察をしていく必要があると思われる。

⁶ Nグラム統計とは、「言語テキストの中の、任意の長さの文字列の出現頻度を知ることができる手法」のことである(山内2009, p.19)。詳細は山内(2009)を参照されたい。

⁷ KYコーパスは、90人分の日本語学習者のOPIインタビュー(Oral Proficiency Interview)を文字化したデータである。90人の内訳は、英語母語話者30人、韓国語母語話者30人、中国語母語話者30人で、更にそれぞれ30人の内訳は初級話者5人、中級話者10人、上級話者10人、超級話者5人となっている(山内2009, p.16)。詳細は山内(2009)を参照されたい。

5. まとめと今後の課題

本研究は初来日の3名(NNS1、NNS2、NNS3)の中国人日本語学習者を調査協力者として、その3名の日本語学習者が1年間の留学という長い期間において(会話データの収録は9か月間にわたって行った)、日本人との接触場面における聞き返しの使用に、量的・質的にどのような変化が見られるかを考察した。

量的に滞日期間が長くなるにつれ、3人の日本語学習者の聞き返し使用が減少するということは見られなかったが、質的にNNS2の「感動詞型」聞き返しの使用と、NNS3の「聞き返し連鎖」の使用に特徴的な変化が見られた。

NNS2は5月期1回目会話の際に、中国語の聞き返しであると思われる「あん?」を使った「感動詞型」聞き返しがあったが、2回目以降はその使用は見られなくなり、日本語としても自然な「感動詞型」聞き返しである「うん?」を多用するようになった。

NNS3は時間の経過とともに、最初に使用した聞き返し連鎖パターンも残しつつ、少しずつ新しい聞き返し連鎖パターンも使用するようになっていくという変化が見られた。

本研究は、少人数の学習者を対象に行った縦断的な研究であるため、結果の一般化が難しいが、今後はさらに同じような背景の留学生について同様の調査を行い、データ数を増やしていく必要がある。

【参考文献】

- 尾崎明人(1992)「聞き返しのストラテジーと日本語教育」カッケンブッシュ・他(編)『日本語研究と日本語教育』,名古屋大学出版会,251-263.
- 尾崎明人(2001)「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」『社会言語科学』4巻1号,81-90.
- 川村よし子(1998)「語彙チェッカーを用いた読解テキストの分析」『講座日本語教育』34分冊,1-22.
- 許挺傑(2013)「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察—聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態—」『筑波応用言語学研究』20号,16-29.
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相 談話使用の分析』,68-106.
- 堀内奈美(2011)「接触場面における「聞き返し」のストラテジー—日本語非母語話者の学習レベルの相違による特徴—」『四天王寺大学紀要』51号,307-322.
- 山内博之(2004)「語彙習得研究の方法—茶釜とNグラム統計—」『第二言語としての日本語の習得研究』7号,141-162.
- 山内博之(2009)『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

【文字化の方法】

[、2人が同時に話し始めたことを示す。(.)、0.2秒以下の短い間合いを示す。言葉::、直前の音が伸ばされていることを示す。言-、言葉が不完全なまま途切れていることを示す。言葉、音が強いことを示す。h、呼気音を示す。..、語尾の音が下がって区切

りが付いたことを示す。°°、音が小さいことを示す。=、2つの発話が途切れなく密着していることを示す。>く、発話のスピードが目立って速くなることを示す。(h)、笑いながら発話を行うことを示す。ローマ字、日本語にないと思われる音を示す。?、直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。、直前部分が継続を示す抑揚で発話されていることを示す。